

京都府乙訓郡大山崎町

史跡

大山崎瓦窯跡



大山崎町教育委員会

2020

1. 平安京造営と大山崎瓦窯

大山崎瓦窯跡は、8世紀末から9世紀前半にかけて、平安京造営に必要な瓦を生産した遺跡です。

平成16年(2004)の宅地造成にともなう発掘調査でその存在が初めて明らかとなりました。関連する史料はなく、当時の名称は不明ですが、地名から「大山崎瓦窯跡」と呼んでいます。平安京の成り立ちを考える上で特に重要な遺跡として、平成18年1月に国の史跡に指定されました。

平安京の瓦の生産体制は、複数の大規模な生産地で構成されています(②)。大山崎瓦窯のほかには、西賀茂瓦窯群・栗栖野瓦窯(京都市、国史跡)、吉志部瓦窯(吹田市、国史跡)が知られています。これらは、窯の構築方法や軒瓦製作に用いる型(瓦範)を共有し、技術の交流がうかがえます。

大山崎瓦窯と吉志部瓦窯は淀川流域に所在します。両者の近くには、それぞれ山崎津・江口という拠点的な港があります。こうした位置関係から、瓦の運搬には、水運を利用したことが推測されます。窯の場所の選定には、近くの港の存在が重要な条件だったようです。



① 大山崎瓦窯跡と周辺施設 (1:15,000)



② 平安京の瓦窯の立地



③ 大山崎瓦窯跡と周辺地形 (南から)



④ 大山崎瓦窯跡と周辺地形 (東から)

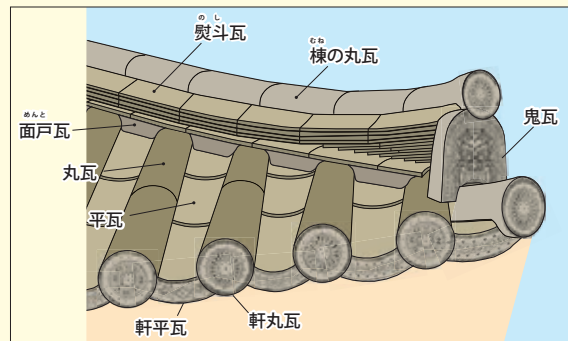
2. 宮殿と瓦屋根

平安京の中でも「平安宮」の範囲は、天皇の住まいである内裏、国家的儀式を行う大極殿院・朝堂院、豊楽院があります。この他に役所の建物が集中しています（⑥）。ここでは、大量の瓦が使用されています。平安時代では、瓦を使う建物は、宮殿・役所・寺院にほぼ限られています。瓦屋根は、都を特徴づける風景でした。

大山崎瓦窯では、軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦、棟に使う熨斗瓦、鬼瓦、それに丸瓦・平瓦が生産されています。生産の年代や体制を知る上で、軒瓦は重要な情報を提供してくれます。軒瓦は、蓮華文や唐草文で飾るため、木製の型（瓦範）を用いて作られます（⑦）。これによって同じ型の製品が識別でき、供給先がわかります。平安京で実際に出土した軒瓦の中には、大山崎瓦窯産が確認できます。

大山崎瓦窯で使用した型には、西賀茂瓦窯群と吉志部瓦窯で使用された型が含まれています。大山崎瓦窯の成立には、西賀茂瓦窯群・吉志部瓦窯との技術交流があったことを示しています。

大山崎瓦窯の独自の型には「西」という文字を刻んだものがあります。また、平瓦には「三川」のスタンプ（表紙の写真）を押す例があります。明確な意味や用途は不明ですが、地理的な関係を表現しているようです。



⑤ 瓦の名称と使用場所



⑥ 平安宮中心部のイラスト（南から） 画：梶川敏夫



西賀茂瓦窯群から移動してきた型の軒瓦



吉志部瓦窯から移動してきた型の軒瓦



大山崎瓦窯で作成された型の軒瓦

「OY」は型式名を表す際の大山崎瓦窯の略称。

⑦ 大山崎瓦窯で生産された軒瓦と型の系譜

3. 隊列を組んだ瓦窯群

全体で、12基の瓦窯を発見しています(⑧)。これらは、位置関係から3つの群に区分されます。便宜的にA群・B群・C群と呼んでいます。A群・B群は各5基、C群は2基で構成されています。A群とB群は「L」字状に、A群とC群は一直線上に位置します。窯の規模は、全て統一されており、生産量が一定になるように規格化されています。

瓦を焼くには5日前後を費やしたようです。その後には、窯の補修も必要でした。窯の配置にまとまりがみられるのは、瓦の焼成と窯の補修を群ごとで行うことによって、生産を切れ目なくするためだったと思われます。いずれかの群が黒煙を常に上げていたようです。

整然とした配置や規格性は、大規模な生産地として計画的に設計されたことを示しています。また、十分な準備を行ったうえで、平安京が造営されたことをうかがわせます。

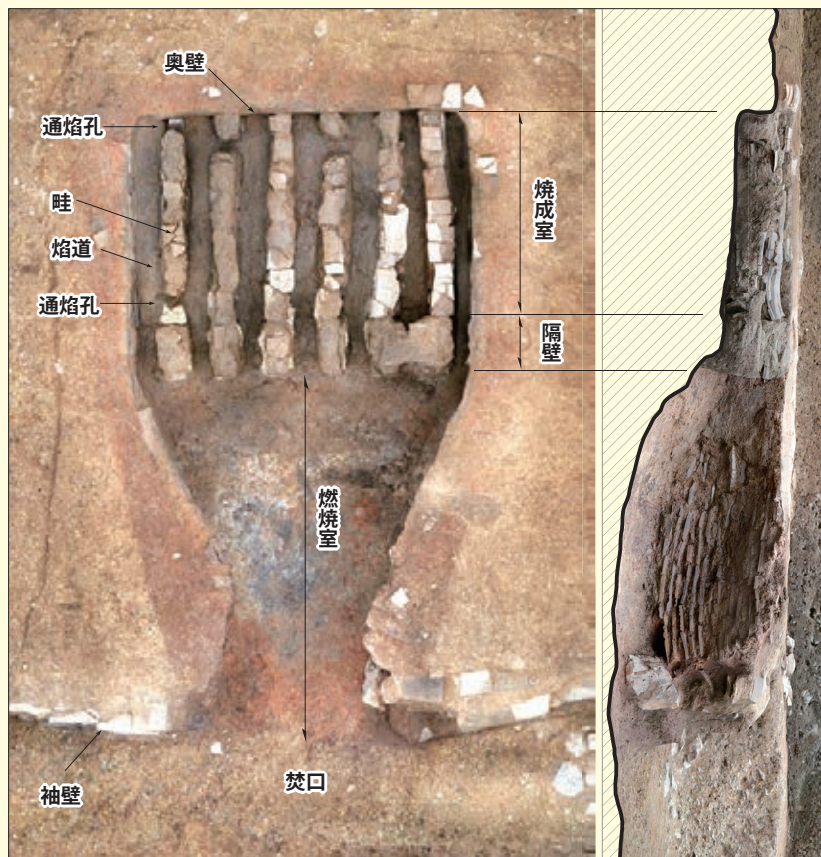
瓦を焼くまでには、粘土の採取、粘土と砂を混ぜる作業、瓦の作製、乾燥などの過程が必要です。これらが行われた具体的な痕跡はまだ確認されていません。今後の調査に期待が寄せられます。

【瓦窯の番号について】

個々の瓦窯には、「1号窯」のように番号が付されています。これは、発見した順に付けたため、A～Cの群別の順序とは必ずしも対応しません。



⑧ 大山崎瓦窯における窯の配置

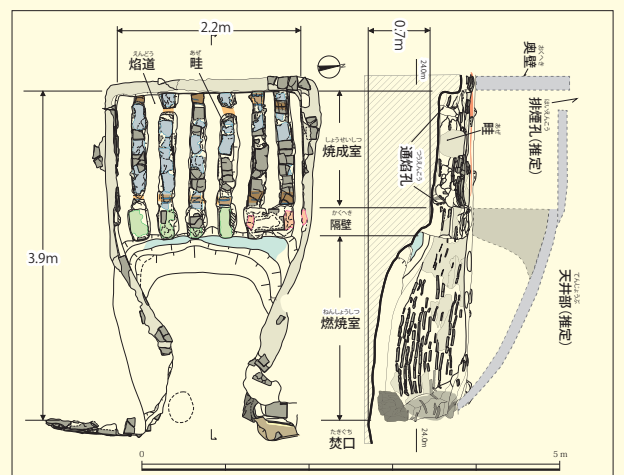


⑨ 5号窯の各部の名称 (東から、1:50)



⑩ 西賀茂瓦窯群 角 杜東群2号窯 (東から)

⑪ 焚口からみた5号窯 (東から)



⑫ 5号窯(有畦式平窯)の構造と断面の復元

4. 窯の構造とA群瓦窯

窯の構造 窯の壁は、半分に割った平瓦と粘土を交互に積み上げて築いています。規模は、全長3.9メートル、最大幅2.2メートル。燃料を燃やす部屋（燃烧室）と瓦を焼く部屋（焼成室）に分けられ、これらは、隔壁で仕切られています。焼成室の床には、「畦」と呼ばれる突起が6本あり、この上に瓦を詰めて焼きます（表紙の図LとM・4頁⑫）。

両部屋には、約70センチ前後の高低差があります。燃烧室の炎は、斜面を駆け上がり、隔壁の根元のトンネルを抜けて、焼成室に達します。焼成室では、畦の間を炎が通ります。畦には切れ目（通焰孔）があり、炎が循環するようになっています。これは、瓦を焼くための専用の構造で、「有畦式平窯」と呼ばれています。

A群瓦窯 窯は等しい間隔（約6メートル）で配置され、焚口を一直線に揃えています（⑮）。全容がわかる2号窯と5号窯では、窯全体の規模が等しいこともわかっています。

窯の前面には、薪（燃料）が雨に濡れないように、掘立柱建物があります。建物は柱と屋根だけの構造だったと思われます（⑰）。焚口の横には、間仕切りのような高まりが二箇所で見られます。2号窯と3号窯、4号窯と5号窯がセット関係にあったことを示しています（⑯）。窯の背後には、雨水の流入を防ぐため、窯の配列に平行して、排水溝が設けられています。



⑬ 焚口からみた2号窯（東から）

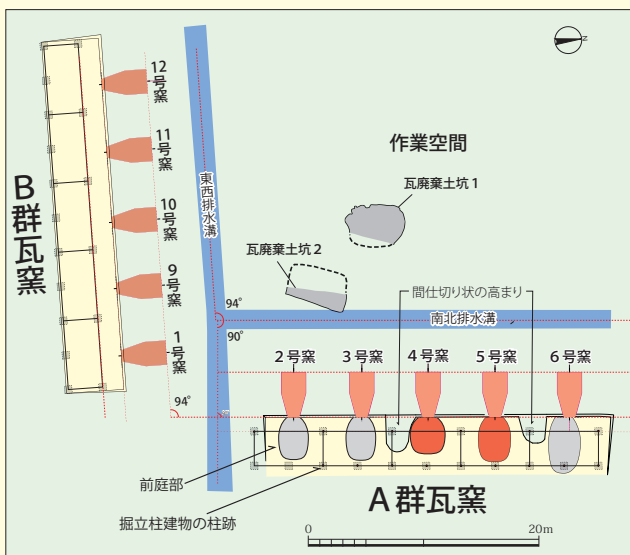


⑭ 焚口からみた3号窯（東から）

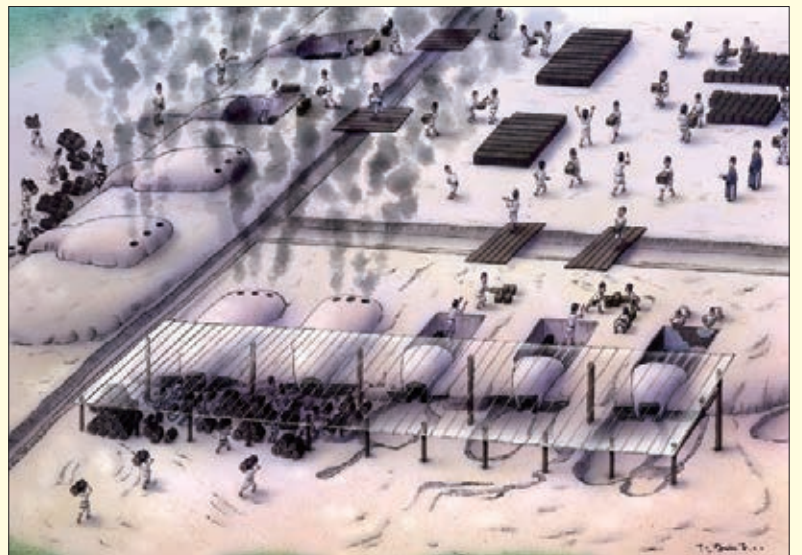


⑮ A群瓦窯（2号窯～6号窯）と1号窯の検出状況（東から）

※ 5号窯は写真を合成。



⑯ A群瓦窯・B群瓦窯の配置図



⑰ A群瓦窯の操業の様子（東から、画：たなべたい）

5. B 群瓦窯

焼成室の奥壁を揃えている状況が確認できます (⑱)。焼成室の幅も 5 基ともに同規模です。窯の配置も等間隔 (約 6 ㍎) です。1 号窯と 9 号窯は窯の全長が同じです。この前面には、掘立柱建物の柱穴が確認できます。各窯の全容を全て確認しているわけではありませんが、こうした配置の特徴から、B 群の瓦窯の数・規模・配列は、A 群と共通しているといえます (⑲)。

有畦式平窯は、焼く前の瓦詰め、焼いた後の製品の取り出しは、窯の背後から行います。A 群と B 群を L 字状に配置し、焼成室に接する空間を共有することによって、効率的に作業がおこなえるように工夫されています。また、排水溝も各群の奥壁に平行して設けられています。2 本の溝は T 字状に交差して、雨水排水の処理が計画的に行われています (5 頁⑳)。

このように A 群と B 群では、全体として計画的に施工されたことがうかがえます。

焼成室の畦の端部に軒丸瓦を使うのは、B 群にみられる独自の構築方法です (㉑～㉒)。1 号窯・9 号窯・10 号窯で確認できます。



⑱ B 群瓦窯の検出状況 (東から)



⑲ B 群瓦窯の検出状況 (上空、南から)



⑳ 1 号窯焼成室 (北から)



㉑ 畦の端部に利用された軒丸瓦



㉒ 1 号窯焼成室、畦の端部に利用された軒丸瓦
(〔1〕北から、〔2〕西から)



㉓ 11 号窯焼成室の検出状況 (東から)

6. C 群瓦窯

連続的な窯の配置は、7号窯・8号窯だけであることが確定しています。C 群でも焚口を揃え、6[㍓]間隔に配置されています。この焚口の位置は、A 群の焚口の延長線上に位置しています。A 群の6号窯とC 群の7号窯の距離（中心から中心まで）は、48.3[㍓]です。これは、2号窯と6号窯の距離 23.9[㍓]のほぼ2倍に相当します。また、焚口前面の掘立柱建物の配置も A 群と共通しています。こうした特徴から、A 群と C 群の配置には規則性がみられます (28)。

焼いた軒瓦は、大半が A 群と共通しており、確実に同じ性格の瓦窯として位置付けられます。

C 群の西側には、崖面があり、一段高い地形（高低差約 6[㍓]）が存在します (26)。この崖面の形状は、瓦窯の配列と平行しており、大山崎瓦窯操業時の地形を反映しています。また、この一段高い地形でも瓦溜まりを確認しています (28 IK44 次調査地点)。ここには、焼成室に接する作業空間のほか、瓦を製作する工房の存在も予測されます。

C 群の配置は、後の時期の^{かみのしょうたがよう}上ノ庄田瓦窯 (2 頁図②) と共通しており、後出する瓦窯の展開を考える上でも注目されます。



②4 7号窯の燃焼室と前庭部 (南東から)



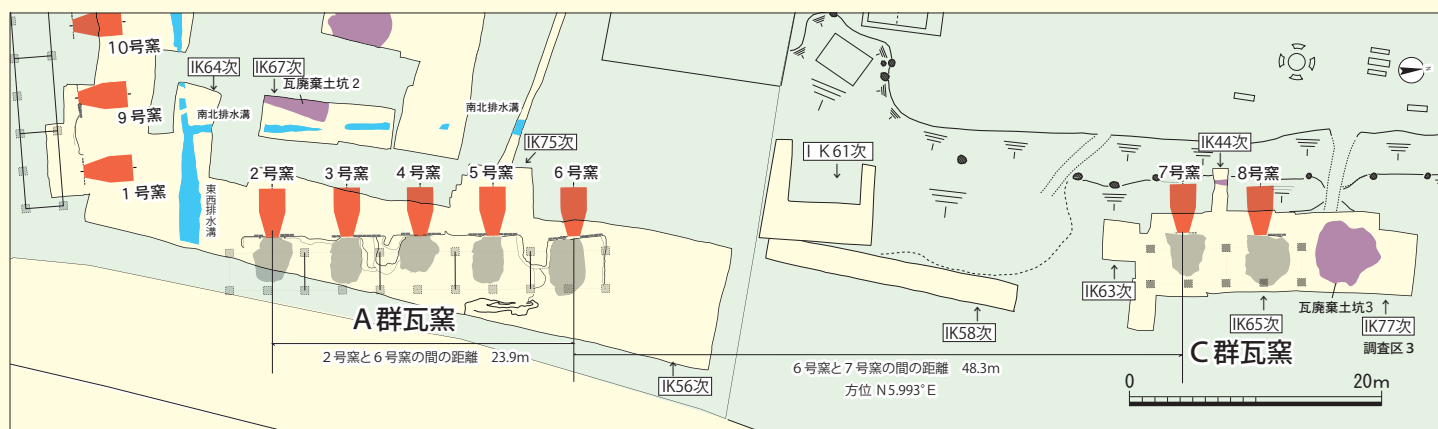
②5 8号窯焚口と前庭部 (北東から)



②6 7号窯・8号窯の検出状況 (北東から)



②7 8号窯北側の瓦の廃棄土坑3 (北から)



②8 A 群瓦窯・C 群瓦窯平面図 (1 : 600)

7. 遺構の保存と整備

遺構は埋め戻して地中に保護してあります。国から指定された史跡の範囲は、公園として整備し、窯などを表示しています。10基の窯がL字状に整然と配列した様子がわかります。

5号窯は発見した実物大の写真を陶板で表示しています。6号窯は、凹んだ状態にしており、将来の体験学習で基礎部分を復元する予定です。このほかの窯の位置には、オタフクナンテンを植えています。排水溝と窯前面の作業場（前庭部）・掘立柱建物は着色で表示しています。

西側の広場からは、瓦窯跡全体が見下ろせます。また、京都盆地・淀川流域が一望でき、比叡山から生駒山まで見渡せます。



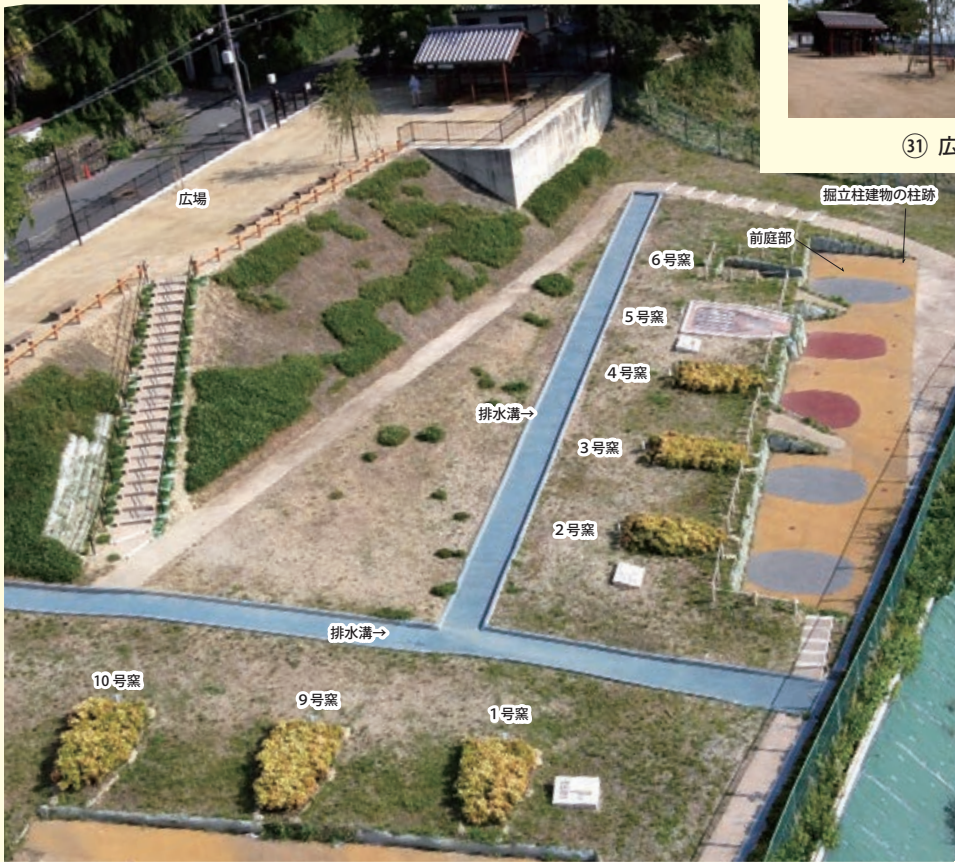
あずまや
29 四阿の軒瓦（出土した軒瓦の文様と大きさを復元）



30 4号窯（左）と5号窯の遺構表示（4号窯は植栽、5号窯は陶板）



なが
31 広場からみた眺め（比叡山から生駒山まで一望）



32 遺構表示の様子（南から）



33 瓦窯発見の様子（南から）



34 位置図

（表紙の写真・図）

- A 大山崎瓦窯出土軒瓦による軒先復元
- B 7号窯燃焼室側壁の横断面（東から）
- C 4号窯の分焰柱と隔壁（東から）
- D 1号窯の分焰柱と隔壁（南から）
- E IK75次調査現地説明会風景（2017.3.4）
- F A群瓦窯の整備状況（東から）
- G 大山崎瓦窯出土の軒平瓦OY207の中心飾
- H 大山崎瓦窯出土の丸瓦
- I 大山崎瓦窯出土の平瓦（凹面に「三川」の刻印）
- J Hの「三川」刻印
- K A群瓦窯作業時の風景（イラスト）
- L 5号窯の平瓦の窯詰め模式図
- M 平瓦の法量とLの窯詰め数量
- N 5号窯（北東から）
- O 5号窯（南から）
- P 5号窯燃焼室側壁（北側）
- Q 3号窯背後の瓦廃棄土坑3（北から）

←表紙の写真・図の配置

		A		
B	C	E	G	
	D			
		I	H	
F				
	K	J	M	L
		N		
Q	P		O	

【掲載資料の許可・出典】

- ・4頁⑩は、京都府京都文化博物館より掲載許可を受けた。
- ・表紙K・5頁⑦は、たなべたい氏の作画。
- ・3頁⑥は、梶川敬夫氏の作画。

令和2年（2020）7月31日 発行
『史跡 大山崎瓦窯跡』
編集・発行 大山崎町教育委員会
〒618-8501
京都府乙訓郡大山崎町
字円明寺小字夏目3
電話075-956-2101（代表）